わたしの宝物

記憶を映す星座早見盤

Un trésor insoupçonné

En souvenir de mon père

空中庭園

私の宝物

「カント」

9月11日（セプテンバー・イレブン）の思い出

クラウド上のデータ

小さな写真の中の小さな私

愁いの室

失われた手紙

命どう宝（ぬちどうたから）

恩師からのフィールドでの「ことば」

Treasure From My Father

『ザ・ビートルズ・コレクション』と生演奏

恩師から頂いた掛け軸

不動明王像

「蝶の舌」に込められた想い

国後島のマトリョーシカ

言葉という宝

九月一一日（セプテンバー・イレブン）の思い出

伊藤達也

その夜、私はパリのセレクトショップ Colette の五周年記念パーティの取材のアルバイトを引き受けていた。会場である郊外のクラブに着くと、ゲストとしてニューヨークからフューチュラ2000が来ていて、取材媒体を一冊進呈すると、もうニューヨークで買ったよ、と一言。でもこっち用に一冊もらっておくからお礼にと、当日配られたポスターを床に無造作に置き、まるで剣豪のように腰に下げたマジックを引き抜きサインだけでなく即興的に絵まで描いてくれた。たちどころに人々が周りを取り囲み、日本から取材に来ていた『Relax』のカメラマンにも撮影された。日本からDJとして NIGO 氏が来るというので、東京で買った彼のデザインしたスニーカーに迷彩柄のミリタリージャケットを着て行った。ロンドンから UNKLE もDJに来ていた。フューチュラは戦闘ロボットが登場する特撮シーンだけをつないでVJをしていた。入れ替わり立ち替わりやってくるファッションやアートのセレブリティたちをしばらく眺めた後、写真家に後をまかせて地下鉄がある時間帯に帰宅した。

翌日、秋も深まりつつあるパリの街を昨日着ていた迷彩柄ジャケットを着て歩いていると、なぜか普段は東洋人など気にもとめないフランス人から痛いほどの視線を感じる。不思議に思いながら家に帰るとテレビには世界貿易センターに突っ込む二機目の飛行機と、同じミリタリージャケットを着たウサマ・ビン・ラディンが映し出されている。フューチュラは翌日ロンドンに行くと言っていたが、急遽家族の待つニューヨークに帰ったようだった。

それから二十年後、Colette も、ベイシング・エイプも、アルバイトをした雑誌も『Relax』もすべてないが、二〇〇一年九月一〇日の日付の入ったポスターに描かれたフューチュラの絵は、国境などないと信じて人や物が世界中を移動していた「二十世紀最後の日」が幻でなかったことの証しとして、宝物と言って良いほど貴重なものとなっている。

（いとう　たつや）

記憶を映す星座早見盤

大岩昌子

「かぐや」。なんとも典雅な名前をもつ日本の月周回衛星が、月の起源と進化の解明という重要な任務を終え、その金属の胴体を月面に横たえてから、まもなく十三年がたつ。衛星から送られてきたたくさんの映像には、おびただしい数のクレーターや渓谷、平原が鮮やかに映し出されていた。

人類は「かぐや姫」の昔から現代まで、月と星々にさまざまな想像力を掻き立てられてきた。十九世紀フランスの作家ジュール・ヴェルヌの小説『地球から月へ』『月世界へ行く』は、人間を砲弾に入れて月へ打ち込むという荒唐無稽な、でもたいへん風刺の効いた物語である。それからおよそ一五〇年、来る二〇二三年には、砲弾ならぬ民間宇宙船による月旅行が計画されている。

夜空を見上げるのがとても好きだった頃がある。小学校に入るまえに移り住んだ豪雪地帯は、空が澄みわたり、信じられないほど星々が美しかった。どこかでいただいた「星座早見盤」が、いつのまにか私の最も大切な持ち物となっていた。一代目の早見盤がボロボロになるころ、子供用の天体望遠鏡を買ってもらうことができた。晴れた夜には望遠鏡を自宅近くの広場に持ち出し、レンズを覗く。明るさや輝き方が異なる無数の星たち。多様性などの言葉は使われていなかった時代、私は自然と、そのあまりに多様な豊かさに圧倒されていた気がする。やがて、都会に転校したのがきっかけで、星空を見上げることもなくなっていった。

数年前、フランスの象徴派、ヴィリエ・ド・リラダンの短編小説「ヴェラ」を翻訳する機会をいただいた。いわゆる幻想小説の佳品である。この物語には、夫が、亡くした妻の姿を夜の星座に見出す場面がある。夫は、しだいに自分の中に妻を蘇らせ、正気を失っていく……。

最近、久しぶりに星空を眺めてみた。子供のころ飽きもせず見つめたオリオン座は、今も変わらずその雄姿を漆黒の空に浮かばせていた。

いま手元にある星座早見盤は、何代目になるだろうか。

（おおいわ　しょうこ）

私の宝物

太田光春

それは五十年以上前から私の手元にあった。しかし、それを宝物と認識したのは、つい最近のことである。そのおかげで、私は就職ができた。そのおかげで、大きな仕事を成し遂げることができた。そのおかげで、名古屋外国語大学と出会い、ライフ・ワークである教員研修と教員養成に貢献する機会を得た。

四十七都道府県すべてを訪れることもできた。北海道の利尻島にも、伊豆諸島の利島にも、唐津市の馬渡島にも、沖縄県の宮古島にも渡った。世界各国を巡った。米国訪問団、フィンランド訪問団、オーストラリア訪問団の各団長を務める機会を得た。駐在大使とともに日本国代表としてカンボジア日本人学校の開校式典で祝辞を述べる栄誉にも恵まれた。

その宝物で、国内外で、数百回に上る講演や講師の依頼を受けた。京王プラザホテルでは、千人を超える外国人の前で講演をし、二年連続でスタンディング・オベーションを頂いた。それを通して、多くの人に出会い、多くの感動を覚え、同じ趣味や目的をもつ人々と固い絆で結ばれた。

それは、早朝ジョッギングの伴侶でもある。散歩する時も、移動する時も、駅や病院の待ち時間も、いつも一緒である。どんなに長い時間であっても、それがとても充実した時間に変えてくれる。それを介して得られる情報から、心や体が健康になった。それに触れていると、活力や意欲が漲ってくる。アイデアが生まれる。脳が若返る。一日の大半はそれと共に過ごす。自覚はないが、夢の中でもそれに浸っているとの家族や友人の証言もある。実際、それと過ごす時間は楽しくて仕方がない。

ありがたいことに、それを使って見せたり、それについて語ったりすることで授業が成立する。学生を笑顔に変えることができる。時には、彼らの学びに向かう姿勢や進路、生き方までも変えてしまう。

それは、孫たちが私を見る目を尊敬の眼差しに変えた。絵本を読んでほしいと、膝の上に座る回数が増えた。一緒に歌う機会が生まれた。

いつまでもこれだけは大切にしたい。そう、私の宝物は英語である。

（おおた　みつはる）

空中庭園

小野展克

私の住む都内のマンションは、少々手狭だが、一つ特徴がある。それはちょっとした庭ほどの広さのルーフバルコニーがあることだ。五階なので眺望も悪くない。勝手に空中庭園と呼んでいる。

植木鉢に針葉樹を植え、妻は季節の花を育てた。木製のテーブルに長椅子、大きな傘も設置、手すりにも木枠を付けた。

友人たちを招いて、バーベキューに興じ、二子玉川で打ち上げられる花火を眺めた。シジュウカラのような野鳥も飛来した。

長椅子で寝そべって、ミステリー小説や音楽鑑賞に浸ることもできる。

しかし、暑い、寒い、日差しが眩しい、風が強い……と空中庭園での快適な時間は短い。空調の効いたリビングのソファの方が、休日の読書には相応しいのだ。

それに、私は根っからの無精者である。友人たちの来訪が一巡すると、いつのまにか植木鉢は雑草だらけになり、手すりの木枠もニスが剥がれて劣化し、長椅子には座ることすらできなくなる。強い風で傘も横倒しになった。空中庭園は、すっかり荒れ野になった。

ついには業者に頼んで、劣化した木製品をすべて撤去することになった。代わりにステンレス製の小さな椅子に、ガラスの台座の簡易なテーブルをセットした。ずいぶんと地味になったが、手入れの手間は省けそうだ。

そんな改修作業の後、新型コロナが直撃、日常が一変し、自宅時間が長くなった。テレワークの合間に、夕焼けに誘われるように久々に空中庭園に出て、ステンレスの椅子に座ってみた。西の空はオレンジ色に染まり、鳥の群れが横切り、雲がのんびりと形を変える。夕焼けが夜のとばりに溶け込むと、東の空には都心のビル群の明かりが灯り、東京の夜景が徐々に立ち上がる。羽田に向かう飛行機が発する赤い点滅が、ゆっくりと流れた。

日々はバタバタと過ぎ、こんなマジックアワーにほとんど自宅にいなかったことに気付かされた。それからコーヒー持参で空中庭園に出ることが夕方の日課になった。クリスマスには、久しぶりに電飾もセットした。

春になったら野菜でも育ててみようかと思案をめぐらせている。

（おの　のぶかつ）

失われた手紙

亀山郁夫

大切なものをしまい忘れることがある。大切にしなければよかったと思うこともしばしばである。これではまるでマーフィの法則ではないか。大切ではないと思っているモノは、目障りなくらい、いつまでも同じ場所にある。思うに、大切なものと感じるものほど失う可能性が多いような気がする。これは、ことによると、モノだけではなく人間関係にもあてはまる真実ではないか。

私がいま、もっとも悔しいと感じている失くしものが一つある。ロシアのある研究者から送られてきた一通の手紙。記憶する限り、最後にこの目で確認したのが、三十五年ほど前のことだ。それ以来、本気になって探せばいずれ見つかるだろうと楽観視しているうち、見失った。悪いことに、この間、奈良、川越、東京と何度かの引っ越しを余儀なくされた。その手紙には、一九八四年十月の消印があるはずだった。学振の派遣研究員として、半年のモスクワ在外研究から帰国したばかりの時期である。その手紙の由来を話そう。

帰国直前、私は奇跡的にも、ロシア前衛運動の生き証人として知られるK氏との知遇を得た。「人嫌い」で知られ、めったなことでは人を部屋に通さない彼が、日本からきた若い研究者に会ってもよいという。それ以来、地下鉄スポルチーヴナヤ駅にある同氏の小さなアパートを何度も訪問することになった。彼の書斎には、個人所蔵になるマレーヴィチの絵が何枚も飾られていた。人嫌いの原因がここにある、とその時私は直感した。帰国後まもなくそのK氏から、思いがけず、いくつかの資料のコピーと励ましの絵ハガキが送られてきた。

それから二十年、私の関心は、すでにドストエフスキーに移り、氏の存在も肝心のその手紙も思い返すことがまれになった。ところが先日、教え子の一人から、K氏関連の資料集がロシアで出るので、ついてはK氏からの手紙等をお持ちではないか、との問い合わせがあった。今度は私が、K氏の生前を知る数少ない「生き証人」の一人となりつつあるというわけだ。それを知ってがぜん意欲が湧き、私は久しぶりに地下の書庫に降り立った。むろん無益とわかりつつ、なお……

（かめやま　いくお）

『ザ・ビートルズ・コレクション』と生演奏

後藤希望

私の宝物は、一九七八年に発売された『ザ・ビートルズ・コレクション』という十三枚のLPアルバムが入ったボックス・セットだ。十三歳の誕生日を目前にしたある日の夕食時、両親に「一年間、お小遣いはいらないから、ビートルズのアルバム・ボックスを誕生日プレゼントに買って！」と頼んだ。一万五千円ほどしたので、子供ながらに、一ヶ月千円のお小遣い十二ヶ月分、プラス誕生日プレゼント代と計算し、親に懇願したのだ。気迫が通じたのか、すんなり了解してくれた。

誕生日に手にしたボックスはずっしりと重く、神々しかった。紺色のボックスの上部には金色で『THE BEATLES COLLECTION』とあり、下部には四名のサインが左からジョン、ポール、ジョージ、リンゴと金字で並んでいる。この日から、学校から帰宅し夕食までは、ビートルズ三昧という日課が始まった。

レコード盤に傷を付けないよう慎重に針を落とし、何度も何度もLPを聴く日々。一緒に歌えない所は、歌詞カードで単語やフレーズをチェックし、意味と発音を覚えた。楽しみながら、英語がメロディーやリズムと一緒に頭の中に入っていった。目、口、耳で覚えた楽曲を、次は、ポールになりきって、ピアノで弾き語りを楽しむことの繰り返し。五感で体得した英語は、その後の人生を歩む道具となった。

留学する国はイギリス以外、あり得なかった。ロンドン大学在学中は、週一回のNHKロンドン支局での仕事以外に、かの有名なアビー・ロードの横断歩道を渡って、映像のポストプロダクションのアルバイト先に通った。ビートルズに関わりのある何かしらに遭遇することを期待した英国留学だったが、メンバーを生で見ることも無かった。

二十年後、生でメンバーを見る夢が、二〇一二年ロンドン・オリンピック開会式のNHKの生中継で叶った。極秘事前資料で、ポールが「HEY JUDE」を歌うのを知った時、「マジか！」と叫んだ。当日、録音の音源とポールの生演奏がズレてダブった最初のAメロを実況席で「目の当たり」にした。私には、レコードでは聴けない「マジか！の生演奏」となった。

（ごとう　のぞみ）

「カント」

佐藤雄大

「カント」。唐突な感じだが、これはそのまま十八世紀のドイツ（彼はプロイセン）の哲学者の「イマヌエル・カント」のことである。私は学部時代、文学部哲学科に所属し、卒業論文もカントの『道徳形而上学の基礎づけ』で執筆した。それ以降大学院では専門が変わってしまったので、「カント研究」というより「カント」を通した経験が今でも大切な「宝物」になっている。

その「カント」の中でもっとも大切な経験はやはり「カントを学んだこと」である。原著をドイツ語で読み、考え、それを論文にしたことが今でも「宝物」になっている。カントの原文は決して読みやすいドイツ語ではないが、当時大学生なりに努力して原文を読み、研究を深め、論文を書いたのはそれ以降何をするにしても自分の自信となり、かけがえのない経験となった。さらに欧米の文献では現在でも頻繁にカントに言及されていて（最近では『永遠平和のために』が頻繁に引用されている）、彼の思想に学部時代に触れておいたことは貴重な経験だった。

そしてその「カント」を通じて様々な人と出会えたことも「宝物」である。まずそのカントを私に教えてくれた大学時代の恩師・加藤泰史先生である。私が大学二年生の時に若手研究者として赴任されてきて、授業もそうだが、年齢が十才差だけなので、一緒にお酒を飲んだりして、本当にいろいろなことを教えていただいた。またわずか数日間の夏期講座だけだったが、ヘーゲル研究第一人者の加藤尚武先生との出会いも印象的だった。ドアを開けながら「スピノザは……」と授業が始まったことはそれまでにない経験で、そのエネルギーと説明のわかりやすさも群を抜いていた。

カントには通称『嘘論文』という問題作もあり、西欧精神を考える際汲み尽くせないほど豊かなものを遺してくれている。授業でも現代の内容に絡めてカントに触れると学生には新鮮に聞こえるようで、その面白さは衰えていない。まだ読めていないカントの著作はたくさんあり、この「宝物」はこれからも私の生活を楽しませてくれそうだ。

（さとう　たけひろ）

言葉という宝

白井史人

ドイツ語で「語彙」を意味する言葉を der Wortschatz という。「語（das Wort）」と、「宝（der Schatz）」からなる複合名詞だ。そう、言葉は宝なのだ。単語を新たに覚えるだけで、宝物を次から次へと身体のなかに蓄えることができる。何と金のかからない宝さがしだろう。

とはいえ、単語を辞書で引いて頭にたたき込むだけでは、ほんとうに自分の宝物になるかはあやしい。むやみに使うことはないけれど、ここぞという時に自分を奮い立たせてくれるとっておきの言葉など、多くは持ち合わせていない。しかし「私の宝物」と言われてふと思い浮かんだのは、駆け出しの研究者としてベルリンに留学していたころ、日本とドイツのそれぞれの恩師にかけられた二つの言葉だった。初めての長期の海外生活のなかで、いつ書きあがるとも知れぬ論文の執筆作業に途方にくれて、次から次へと流れてくる新しい言葉を消化するので満腹になっていた。そんな時、日本の先生から届いたメールのなかの言葉と、滞在先の教授との面談でかけられた言葉は、お二人にとっては何気ない当たり前の言葉だったのだと思う。それでも、語彙としてはすでに理解していたつもりだったその言葉は、ひそかなモットーとしてそれ以来私自身を支えてくれている。

とはいえ、自分でその言葉を誰かに発したことはほとんどない。贈り物として勝手に受け取ったのに、意味を本当に理解し、実践できているだろうかと自省に駆られてしまう。自分が発した瞬間に、限りなく陳腐で貧相になってしまう気がする。とするとその言葉はまだ、「私の」ものになっていないのだろうか。それとも、自分のものにならないからこそ、宝物として自分を照らし続けてくれているのだろうか。

こんなことを書いているうちに、その言葉を、ここで打ち明ける勇気がなくなってしまった。秘すれば花。もう少し自分のうちにとどめておきたい。かわりにひとつ、とあるオペラからの引用でご容赦を。

「言葉よ、言葉、汝、我に欠けたるもの！（O Wort, du Wort, das mir fehlt!）」（シェーンベルク《モーゼとアロン》より）

（しらい　ふみと）

恩師からのフィールドでの「ことば」

地田徹朗

わたしはモノ持ちで無駄づかいをする割には、「さあ、君の宝物はなにかね？」と聞かれると、十九のときに妹からもらったドラえもんのトラベルポーチくらいしか思い浮かばない。確かに、このトラベルポーチとは世界中を旅してきたし、今の私のメインの研究フィールドであるアラル海に行くときも常に一緒。そんなことを考えながら、ふと思い浮かんだのが、二〇一四年九月、人生二度目のアラル海でのフィールドワークに行った時に、わたしの環境問題研究の師がかけてくれた「ことば」のことである。

その年のフィールドワークは、ロシア科学アカデミー動物学研究所のニコライ・アラディン先生、総合地球環境学研究所（当時）の窪田順平先生、そして、フランスからのドキュメンタリー番組の撮影クルーが一緒というイレギュラーなものだった。フィールドの移動は撮影クルー中心にまわっており、思うような調査ができないとわたしはストレスを溜めていた。ある日の朝、いつものように朝食の後にアラディン先生が全員を集めて一日の予定を確認した。「またクルー中心の一日だ」と感じ、窪田先生に愚痴をこぼす。すると、先生は、「お前、あの場でアラディンは議論をオープンにしてくれているのだぞ。自分の主張をしないとだめだろう」と強めのことばで叱責してくれた。「ああ、そうなのか」とわたしは気づき、即座にアラディン先生に、「今日、わたしはこうしたいです」と話すと、アラディン先生は「それはいい」と二言返事。その後は、撮影クルーと調整しながら、やりたい調査ができるようになっていった。

今は思う。窪田先生がかけてくれたこのことばは、わたしの宝物なのだと。あたりまえのことだけれど、グループでフィールドワークを行う際の自己主張と民主主義の重要性。これはその後、自分がグループを率いて調査をする際にも生きている。

二〇二一年五月二十六日、癌と闘ってきた窪田先生はこの世を去られた。順平さん、別れは悲しいけれど、先生は前を向けと言うでしょう。かけてくれた数々のことばを胸に研究に邁進します。感謝、そして、合掌。

（ちだ　てつろう）

命どう宝（ぬちどうたから）

濱嶋　聡

二〇二〇年一月、倒れた折に石油ストーブ上のやかんの熱湯を背中に被り、救急車で搬送された。約一年後、ケロイド上に肉が盛り上がり、担当医に「やっとここまで回復しましたね」と言われたその夜、再び同じ事故で救急車搬送（今回は左横腹、右膝、左ひじと広範囲）。大晦日、正月から四月中旬まで毎日治療のため通院（担当医からは入院を勧められるほどの重症）。ここからは中学時代の受難。友人の父親が練習用に自宅庭に設置していたゴルフケージ内でスウィング中、友人の振ったゴルフパターが私の顔面を直撃。病院へ搬送中、意識を失う。救急病院で鼻と口から血を噴き出している私の姿を見て、母親が知り合いの医師の病院へ搬送。その病院で意識を取り戻したのはその三日後。両親から葬式の準備もしていたことを後ほど知らされる。後一日意識が戻らなかったら赤井英和氏同様、ドリルとカッターで頭蓋骨切開して血を取り出す手術も予定されていた。意識不明中、よく言われるお花畑が見えるといった経験もなかった。ただ、意識が戻った瞬間、全く体が動かず鏡で見せてもらった顔色も土色で、このまま寝たきりの生活が続くのかといった不安に駆られたことは鮮明に記憶している。幸運にも体力、運動能力も順調に戻り、当時入部していた野球部と新聞部（二股）にも復帰。最後に「世界あの町この街」でも書かせていただいたクイーンズランド大学大学院留学中、現地のスカイダイビングクラブの初ジャンプで強風に煽られパラシュートの操縦を誤り池の土手で腰を強打、失神後池に落ちて意識回復。腰椎圧迫骨折（第一腰椎陥没）のため立ち上がることが出来ずに池の底を這って（匍匐前進）岸に辿り着き、王立ブリスベン病院に入院。医師からは脊髄損傷を逃れ下半身不随にならなかったのは実に運がいいと言われ、退院後三か月間、肩から腰まで石膏で固めて授業に出席。石膏が重く、授業中は、何度も立ったり座ったりする許可を特別にいただく。今も第一腰椎に第二腰椎がめりこみ、尾骶骨も曲がったままながら、命あっての物種。「命どう宝（ぬちどうたから）。その他、中型バイク事故での救急車搬送の話は省略。

（はましま　さとし）

南ブリスベン スカイダイビングクラブ　1984年1月

愁いの室（むろ）

林　良児

文学研究には個人をその対象に同化させる力が働くようである。知性が介入せずに甦る実在こそ本当に生きたといえる時間なのだと言ったのはプルーストだが、いつしか、私はだれにも起こりうるそのような蘇生をことさら待ち受けるようになった。一切の外的干渉を知らず、純粋なままに保たれているもう一つの自我の世界は、私たちの知らないところでその深みを増してゆくらしい。

私が育った家は、間近に東北本線が走っており、駅に止まる汽車が一日の時計代わりだった。強い風が吹くとギシギシと音を立てることもある粗末な造りだったが、竹やぶと一本の雷神木に守られていた。いろいろな事情で、私は祖母と過ごすことが多かった。祖母は喘息持ちで、ひどく咳き込むたびに私は胸を痛めた。中学生の頃に家は増築されたが、祖母は古い家のほうを好み、新しい部屋に移ろうとはしなかった。やがて、私は東京の私学に入った。長い休みに帰省するたびに、祖母はとても喜んでくれた。しかし、大学三年の夏休みを過ごして東京に戻るとき、「身体に気をつけてね」と声をかけると、祖母はうなずきながら「また来なさいよ……」と寂しそうに答えた。そして、その年の明けた二月に祖母は八十七歳で亡くなった。死に目に会えなかったやるせなさが今も心に残る。

意識的に思い出す過去ではなく、恩恵のように再び生きることを許される過去は、やはり遠い。時間の篩にかけられて記憶の壺のなかに沈むまでには、それ相応の歳月が必要とされるのだろう。しかし、甦ろうとする記憶が明瞭に一つの形態をとるその瞬間に立ち合うとき、見えてくるものは限りなく懐かしい。もはや過去からでなくては何一つ期待することはできないのだろうか。私は記憶に拘りすぎていることに気づいて、いき過ぎた思いを鎮める。それにしても、さまざまな愛しい記憶を閉じこめている壺の在りかはどこなのか。「胸にある蒼き愁いよ」と言って、生の哀しみをうたったメーテルリンクが思い出される。記憶の壺の宿るところは、密やかな宝玉とでも言えそうな、わが胸の愁いの室なのかも知れない。

（はやし　りょうじ）

不動明王像

福田眞人

私は神道の家系であった。それ故に仏教を信仰していない、という訳でもない。あるいは神道そのものに心酔している訳でもなかった。

昔、客間に安置されていた不動明王像を見て驚いた。そこには忿怒（ふんぬ）の表情が見事に披瀝されていた。それがすぐさま信仰には結びつかなかったものの、幼心に畏怖を感じたのである。

それから暫くして、京都の自宅に通り掛かった虚無僧（こむそう）が息せき走りこんで来た。闇雲に尋ねて来た和尚は、この家には何とも言えない妖気が漂っている、よって誠に失礼ながら何かを拝覧したし、という事であった。

和尚は居住まいを糺して勤行（ごんぎょう）して、やおら不動明王に魂入（たましい）れがあると宣うた。以後、謹んで勤行されたいとの事だった。それから幾年か経て、遠く栃木の名刹から住職が訪ねて来られた。そして虚無僧から伝え聞いた話から、像を是非ともお譲り戴きたいとの事だった。手許に置かれた風呂敷が目についた。そこでは札束が只ならぬ量であると知れた。

「信仰はござらぬ、また美術品の蒐集のためでもないが、昔から此処の家におります」と父は述べて、やんわりお断りになった。

このような次第で、父母と私で代わる代わる誦経をすることとなった。

私の家には、中国の唐時代の仏頭がある。また、天衣無縫の観音像がある。そして偶然、私はアメリカ留学中に二体の仏像を得た。はるばるボストンから船舶に載せて蒲団に包んで名古屋に搬送させた。その話をすると仏像に詳しいインド学者が、のっけから私を小馬鹿にしていたが、二体を前に、研究室のフロアで唐突に跪いて、ああ、素晴らしいと溜息を吐いて声が出ない。そして像には性根（しょうね）があること、今後勤行をお願いしたいのでゆるゆる疎かにさせてはなりませぬ、と厳命された。

私どもはどこでも仏像を得る。その代わりに座して勤行を努める。

私は、どうしようもなく、無心に祈る。家族や歴史や夢想を語るように祈る。どうも宝物よりも浄らかな心根が愛おしい。

こうして中国やインド、タイ、インドネシア、アメリカと経巡る。

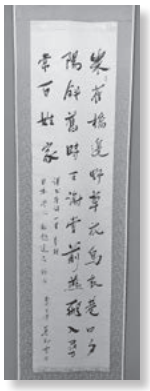
（ふくだ　まひと）

恩師から頂いた掛け軸

船越達志

大学院博士課程の学生であった頃、中国・南京大学に留学した。「導師（指導教官）」の任に当たってくださったのは、中国古典文学の権威・呉新雷教授であった。帰国の直前に、呉先生から一枚の書（帰国後に表装）をいただいた。そこには「朱雀橋邊野草花　烏衣巷口夕陽斜　舊時王謝堂前燕　飛入尋常百姓家」と大書してあった。これは唐代の詩人劉禹錫の「烏衣巷」という詩（七言絶句）で、南京留学の記念にと呉先生が特に私のために揮毫してくださったのだった。「烏衣巷」とは南京にある地名である。奥書きに「謹書唐詩一首奉贈　日本学人船越達志雅正　南京大学呉新雷」とある点がとりわけ重要で、私にとって特別な価値を持つ。

留学期間中、呉先生には本当にお世話になった。論文執筆に関わるご指導のみならず、資料収集の面でも便宜をはかっていただいた。度々ご自宅にも呼んでくださった。先生の書斎における語らいは、今も折に触れて目に浮かぶ光景である。先生との思い出は尽きないが、中でも印象深いのは、呉先生のご紹介により参加した北京開催の『紅楼夢』国際学会である。夜の十時に南京駅を出発し、翌日の午後四時過ぎに北京に到着した。約十七時間に及ぶ呉先生との二人旅は、貴重な経験であった。北京での国際学会は、三日間にわたって開かれた。後に学術誌に掲載された会の様子を伝える報告文には、以下のような記述がある。「会議の開催中に多くの紅学（『紅楼夢』研究を指す）に関する活動が開かれた。八月八日の晩には、北京飯店東楼で紅楼書画親睦会が開かれた。……呉新雷先生は墨痕鮮やかに筆を振るい、会議参加代表一同は口を極めて絶賛した……」中国の古典文学研究者は、学者であると同時に書画の名人である事が多く、こうした規模の大きな国際学会においては研究発表の合間に「揮毫会」が開かれるのが常であった。呉先生もそうした書家のお一人であった。この日、呉先生の揮毫は衆人注目の的であった。そしてこの一同「絶賛」の対象となった一筆が、正に私がいただいた、この掛け軸なのであった。美術的価値を持つばかりでなく、私にとっては先生との思い出の品である。（ふなこし　さとし）



小さな写真の中の小さな私

ムーディ　美穂

大学生の頃であったと思う。何か必死に探し物をしていた。何を探していたのかは憶えていないが、イライラとしたその時の気持ちは憶えている。当時のことを考えると、いつもどこか殺伐とした気持ちでいたように思える。ボーイフレンドや学校、友だちや就職のことなど、取るに足らないけれど、二十歳の自分にとってはちょっとした問題をたくさん抱えていたのだろう。

さて、探しているうちに、小さな箱を見つけた。人から貰ったり、お小遣いで買ったりしたアクセサリーを入れておいた箱であった。埃っぽい蓋を開けると、ジャラジャラとしたネックレスやブローチの下から、小さな写真があらわれた。三センチ四方ほどで、ネガ（今ではほぼ死語であろう）くらいの大きさである。縁側で、祖母に抱かれた一歳未満くらいの私と、その傍で膝を少し曲げ、私の顔を覗き込んでいる母が写っている。ブクブクと太った私は、大好きな祖母に抱かれて嬉しいのだろう、満面の笑顔でこちらを見ている。白黒写真だが、三人のいる縁側には燦々と日が差しているように見える。母は私に「笑って！」と言っているのかもしれない。祖母は私の機嫌が悪くならないよう、揺らしたり、歌ったりしているのかもしれない。この写真を撮ったのは父か、祖父だろうか。そんなことを考えながらしばらく見つめているうちに、イライラとした気持ちはいつの間にか消えていた。

あれからその写真は違う箱に移し、幾度かの引っ越しを経て、今はすぐに出せるよう、自室の机の上に置いてある。あの縁側のあった家はもうないし、祖父母もいない。母も私も当然年を取って、あの写真の面影はない。でも、心の中がひんやりするような気持になるときは、あの日溜まりの暖かさをを感じたくて、取り出しては眺めている。まん丸い顔をして、にこにことご機嫌な赤ちゃんは、本当に周りから愛されていたのだな、と思うと、また明日から頑張ろうかな、という気持ちになるのである。

（むうでぃ　みほ）

国後島のマトリョーシカ

安井朱美

二〇〇四年の八月、私は国後島にいた。独立行政法人北方領土問題対策協会による「北方四島交流事業日本語講師派遣事業」のためだ。北方領土における日本語教育は、旅券やビザの所持と提示を必要としない、いわゆる「ビザなし交流」の一環で、一九九八年から年に一回ずつ実施されている。国後島、択捉島、色丹島の三島それぞれに日本語講師二名と通訳、政府同行者が一名ずつ、合計四名がチームとなり派遣され、夏の一か月間、文字通り寝食を共にしつつ、島民に日本語を教えるというものだ。

日本政府によって建設された「友好の家」は単なる宿泊施設ではなく、毎食ロシア料理が提供される食堂でもあり、教室でもあり、私達にとって生活のすべてだった。その当時は、安全上の理由から昼間でさえ基本的に自由に一人で外を出歩くことはできず、インターネットは言うに及ばず、衛星電話を除いては電話も使えず、加えて停電や断水も頻繁に起こる毎日で、世界からも時代からも完全に取り残された感じがしていた。

そんな中、唯一の喜びであったのは、子どもから大人まで述べ七十名ほどの島民が計二十回ほど行われた授業にとても熱心に参加してくれたことだった。別れの日には多くの受講生が艀まで見送りに来てくれ「ありがとう」「また来てください」と口々に言いながら手渡してくれたもの、それが大小様々なマトリョーシカだった。いったい島のどこにこれほど多くのマトリョーシカが隠れていたのかと驚き、胸が熱くなるのを感じた。

今もそれらのマトリョーシカはあの当時の姿で、自宅の本棚に並んでいる。一見どれも同じように見えるが、よく見ると描かれている顔も色もデザインも微妙に少しずつ異なっていて、その一つ一つに受講生一人一人のあの時の笑顔が重なる。この特別な意味を持つマトリョーシカは、国後島で過ごした貴重で濃厚な一か月と数々の思い出とともに、生涯忘れられない宝ものの一つになっている。北方領土問題は未だ解決されないまま、すでに七十五年余りが経っている。あのマトリョーシカの笑顔に再び会いに行ける日はいつだろうか。

（やすい　あけみ）

クラウド上のデータ

若山公威

自分の宝物って何だろうか考えてみた。一番はもちろん家族である。最近飼い始めた愛犬も、たまに手を噛んでくるが、疲れたときに癒してくれる大切な存在だ。では物では何だろうか。あまり物に執着する性格ではないのか、特別に大切にしている物は思い当たらない。そういえば、いつも身に着けている物があった。スマートウォッチである。お風呂に入るとき以外は、寝るときもはめている。もともと身に着けようとしたきっかけは、七年ほど前に『データの見えざる手』（矢野和男著）という本を読んだことだった。「幸せは加速度センサで測れる」という言葉が印象に残り、ＩｏＴデバイスの可能性について考えるきっかけとなった。

このスマートウォッチは時間を表示してくれるだけではなく、歩数、心拍数、活動量、睡眠時間といったデータを常時取得して、インターネット上のクラウドに保存してくれる。一日の歩数が液晶画面に表示されるので、一日一万歩を目指して歩くきっかけとなる。ただ、これらのデータは、自分の健康維持のためだけのものではない。何十年も蓄えたデータが、将来医療に役立つかもしれない。一人だけのデータではなく、何百万人ものデータが集まれば、いわゆるビッグデータとなり、それを分析することで病気にかかりそうな人を予測することもできるだろう。

結局、大切なのはクラウド上に保存されているデータであって、スマートウォッチ自体ではない。やはり、物には興味がないみたいだ。データといえば、写真、スケジュール、メモ、自分のスマホから取得されるＧＰＳデータといったものは全てクラウド上に保存している。クラウド上のデータが無くなると、自分の記憶だけになってしまい、日常生活にも困ってしまうだろう。世間では、人工知能に職を奪われるといった不安も聞かれる。しかし、メガネが視力を補完してくれるように、記憶を補完してくれているだけだ。余分なことを覚えなくてすむ分、知的な生活ができていると胸を張って言えるようになりたい。

（わかやま　きみたけ）

Treasure From My Father

Crane Paul Allen

It was a cold gray somber morning with rain turning to sleet, then snow – a typical late November day in Michigan and rather appropriate for a funeral. Upon arriving at the mausoleum where my father would be entombed, I noticed that following the hearse was a long snaking procession of automobiles filled with folks who had come to pay their last respects to a man who had contributed so much to the community through education and sports. Rather than grief, I was overcome with awe and respect for a man who would be dearly missed by so many, not in the least by his loving wife of nearly fifty years, his six adoring children and by that time, more than a handful of grandchildren. It was his voice and words that I recalled.

"Remember who you are," my father would say to us whenever we left the house, whether we were going to school, to sports practice, or just to hang out with friends. Another piece of advice my father would give, usually in the same context, was "Remember to keep your nose clean." I recall thinking that it was such a peculiar thing to say, but eventually I came to realize that he was talking about the importance of family honor, reputation and integrity.

Through this journey called life, the latitude of my experiences and the diversity of people I encounter invariably influence and challenge my worldviews while revealing and making transparent the true characters and intentions of those around me. Though I have made my own way in the world becoming independent and self-reliant, the words of my father continue to echo in my heart. Not only through his words, but also through his attitude and behavior, my father was nurturing the development of our characters.

My father was a genuinely kind, sincere and earnest man whose boundless cheerfulness and positivity encouraged and inspired all he encountered. He was also a deeply faithful and spiritual man, who after retirement, would attend mass almost daily followed by stops at the local hospitals to visit the sick among his friends and even complete strangers. And if the weather was agreeable, he would often be seen at the country club playing a round of golf.

Though my father no longer walks the greens and fairways upon this earth, he continues to live within my heart. Not a day goes by that I do not feel his presence as I consciously try to sustain the treasure my father cultivated in me through his words and his actions: to be a person of solid character full of integrity.

（ポール アレン クレイン）

Un trésor insoupçonné

Jérôme Paccoud

Selon le dictionnaire "Le Robert", un trésor se définit au sens propre, par un « *Ensemble de choses précieuses amassées et cachées. Découvrir un trésor* ».

Effectivement, l'évocation du mot « *trésor* » me replonge instantanément dans l'enfance. Les œuvres artistiques littéraires ou audiovisuelles traitant de piraterie, d'une mystérieuse carte au trésor, ou tout simplement les parties de chasse au trésor auxquelles nous jouions avec les gamins du quartier ressurgissent du passé. Aujourd'hui adulte, Si j'aime prendre soin des objets et des choses pour les conserver dans les meilleures conditions, on ne peut pas dire que j'y sois viscéralement attaché. Je ne collectionne aucun objet et ne leur voue nul culte permettant de dire que je détiendrais un ou des trésors.

Mais un trésor, cela se définit également par quelque chose que l'on ne peut saisir ni même toucher. Ainsi, au sens figuré, la deuxième acception du dictionnaire renvoie à « *une abondance précieuse de choses utiles, belles. Déployer des trésors de patience* ».

Aurais-je donc un trésor insoupçonné que je possède de longue date ?

Ce trésor, je l'ai découvert par hasard il y a maintenant une dizaine d'années. À cette époque-là, bien qu'encore jeune et sportif, je suis tombé soudainement malade avant d'être hospitalisé en raison de l'aggravation inquiétante des symptômes. Ce fut une expérience inédite et surtout une épreuve difficile qui restera dans ma mémoire.

Durant mon séjour à l'hôpital, j'étais très affaibli ; les tâches les plus élémentaires à accomplir me paraissant des obstacles insurmontables. Cependant, après quelque temps et moments de doute, mon état de santé s'est lentement amélioré ; puis heureusement un jour, la guérison est survenue. Il a néanmoins fallu plusieurs mois de patience avant de retrouver le cours normal de ma vie.

De cet épisode marquant, j'ai pris conscience de notre fragilité mais aussi et surtout de l'importance à accorder à sa santé, sans laquelle plus rien n'est possible. Je vis désormais avec la certitude d'avoir ce trésor inestimable à protéger. Comme l'a dit l'écrivain et médecin Chauvot de Beauchêne, « *La santé est le trésor le plus précieux et le plus facile à perdre ; c'est cependant le plus mal gardé* ».

（パク ジェローム）

En souvenir de mon père

Laurent Annequin

Attiré depuis toujours par les livres, les CD et les films sous différents supports ainsi que par les objets technologiques, je suis parfois considéré comme une personne matérialiste. Cependant, en réalité, je n'attache que peu d'importance aux choses en général. Celles-ci vont et viennent dans ma vie, apparaissent à un moment donné et disparaissent aussi vite pour être remplacées par d'autres, sans réelle émotion.

Cependant, il y a un objet qui me suit depuis déjà plus de 35 ans. Il s'agit de la chevalière de mon père que j'ai reçue après son décès. C'est une chevalière en or ou peut-être simplement plaquée or. Je n'ai aucune idée de sa valeur marchande car je ne l'ai jamais fait expertiser. Cela n'a de toute façon aucune importance à mes yeux, car sa valeur est uniquement sentimentale. Elle est pourvue d'un grand chaton ovale aux initiales de mon père. Deux grands A majuscules emmêlés, en lettres cursives. Même si certaines chevalières servaient autrefois de sceau pour marquer la correspondance, je n'ai jamais vu mon père l'utiliser de cette manière. C'était probablement un simple bijou qu'il avait dû recevoir en cadeau, comme beaucoup de Français, au moment du passage à l'âge adulte. Et ce fut d'ailleurs le cas pour moi, puisque je l'ai reçue à 17 ans par la force des choses. Cette bague volumineuse, je l'ai gardée à mon annulaire jusqu'à mon mariage. Puis je l'ai remplacée par une alliance, moins lourde et plus discrète. Quand je regarde cette bague désormais enfermée dans un petit coffret, je repense aux jours heureux que nous avons vécus tous les trois avec ma mère. Et un sentiment de nostalgie m'envahit. C'est dans ces moments-là que je prends conscience du vide qu'il a laissé dans notre vie. Une disparition suite à une longue maladie, comme on dit souvent, sans jamais vraiment la nommer. Même si cette disparition a certainement été pour lui une délivrance à la douleur, elle a en revanche dévastée ma mère à tout jamais, la laissant depuis de longues années à ses souvenirs, sa peine et ses regrets.

De mon côté, les séquelles furent heureusement moins graves, sans doute parce que pour les plus jeunes, la vie ne fait que commencer, avec ses multiples surprises et rencontres qui font qu'elle vaut la peine d'être vécue. Cette chevalière que je chéris comme un trésor restera pour moi le meilleur moyen de raviver mes souvenirs de ce père aimant et de lutter contre l'oubli.

（ローラン　アヌカン）

執筆者一覧

フランス語学科	伊藤　達也
フランス語学科	大岩　昌子
英米語学科	太田　光春
世界共生学科	小野　展克
学長	亀山　郁夫
国際教養学科	後藤　希望
現代英語学科	佐藤　雄大
世界教養学科	白井　史人
世界共生学科	地田　徹朗
世界共生学科	濱嶋　聡
フランス語学科	林　良児
世界教養学科	福田　眞人
中国語学科	船越　達志
現代英語学科	ムーディ　美穂
国際日本語教育インスティテュート	安井　朱美
世界教養学科	若山　公威
世界共生学科	Crane Paul Allen
フランス語学科	Jérôme Paccoud
フランス語学科	Laurent Annequin